慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	特集「社会学理論と他者性」によせて
Sub Title	
Author	鈴木, 智之(Suzuki, Tomoyuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2002
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.7 (2002.) ,p.1- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 「社会学理論と他者性」
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20020000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集「社会学理論と他者性」によせて

2001年度大会・シンポジウム企画担当　　鈴木　智之

「他者」のプレゼンスが高まっている。いささか落ち着きの悪い言い方ではあるが、さまざまな研究の場でしばしばそのような感覚を抱くようになった。私たちが社会学の研究者として何かを語ろうとする時に、「他者」の存在を強く意識しなければならない場面が増えているということであろうか。

もちろん、そこで「他者」と呼ばれているものの現れ方は実に多様であり、それを一言で括ってしまうことがすでに困難であるようにも思われる。しかし、言葉の多義性、指示されている現実の多様性にもかかわらず、そこにはゆるやかに通底する問いが孕まれている。

一例として、社会的な相互作用場面を対象化する時のことを考えてみる。この時私たちは、抽象化された行為者ＡとＢの関係としてこれを捉え、第三者的な観察者Ｃの位置から記述をしたり、モデル化を行ったりすることができる。この段階では、「他者」の問題はさほど大きく浮上してこない。ＡとＢは互いに対称的（均質）で、互換可能な存在であり、観察者Ｃはその相互作用場面を、外部から、総体としてとらえることができるからである。しかし、同じように社会的な相互作用を問う場合でも、これを「自己」と「他者」の関係の場として、つまりある特異な視点に立つ「私」とその「私」とは異なる存在である「他の誰か」の関係の場面としてみれば、記述の方法や様式はまったく異なるものとなる。この時、観察者自身もまた、その非対称な関係に巻き込まれており、必ずしも中立的な距離を保つことができないのだとすれば、方法の選択はますますややこしいものになっていく。

いずれのアプローチの仕方を取るのかは、さしあたり個々の研究者の選択の問題である。しかし、何らかの形で「他者」の存在を意識においた記述や理論化が、さまざまな状況で要求され、また研究者自身によってもそれが追い求められている。ではなぜ、そのような「自己－他者」の関係に対して自覚的な（過敏な？）社会学が求められているのか。そして、そのような課題を引き受けようとする時に、私たちはいかなる記述の視角を設定し、どのような理論を構築しなければならないのだろうか。

2001 年度の「三田社会学会大会」のシンポジウムにおいて「社会学理論と他者性」というテーマを設定した際、私の念頭にあったのはこのような問題であった。焦点を結びにくい漠然とした問いではあるけれども、現実の記述や理論構成の中で「他者」の存在とどう向き合うのかという問いかけは、現時点で社会学に課せられている認識論上の条件に触れているように思われたのである。

おそらく、社会学は今、自らが普遍的かつ中立的な視点から、偏りなく現実を記述しうるという主張を容易に掲げることができなくなっている。社会学的な知はそれ自体、多様に分化し相互に権力的な位置にある社会関係の網の目に深く絡めとられており、学問的に算出される知識は、存在拘束的な限定を受けるばかりでなく、社会的な利害の生産・再生産に寄与してしまうかもしれない。

それはまた同時に、社会学が、特権的な場所に立って社会的現実の全体を描出しうるという信憑を失ってしまったということでもある。社会の中で、限定的な視点から、その社会についての像を提示しようとする者は、単に自らの認識の「構築的な性格」を引き受けねばならないばかりでなく、自らの視界に拭い去りがたい盲点がひそみ、その死角の存在によって自己の認識が絶えず脅かされるものであることを自覚せざるをえない。

こうした条件の中では、「他者」の存在が、ことさらに切実な問題として浮上してくる。例えば、「自己」と「他の誰か」とのやりとりを記述しようとする時、観察者である「私」は、「中立」を装った視点から「他者」の「他者性」を消去してしまうか、さもなければ特定の社会的な視座からある種のカテゴリーを付与して、「私とは異なる何ものか」としてそこに「他者」を構築してしまうことになるだろう。前者を選択すれば、「私」と「他者」との非対称な関係を隠蔽してしまうことになるけれども、後者をとれば、その語りを通じて関係の不均等性をさらに強化してしまいかねない。

さらにまた、限定的な視点から特定の社会的な現実を語るということは、その「現実／言説」の外部に、語られなかった何かを取り残すということ、もしくはそれを語らないことによって「外部」を構築することでもある。その外部性、すなわち自己の現実の外にあるという意味での「他者性」に自覚的であらざるをえない状況がある時、学問という言説的な営みの中でこれにどう対処すればよいのだろうか。

周知のように、フェミニズムやカルチュラルスタディーズは、ここに述べたような、「他者」をめぐる認識の政治性への批判という性格を備えている。社会学的な知の形式そのものが、しばしば無自覚なジェンダーバイアスを担い、あるいは西欧中心的な世界観を押しつけるものとなってこなかったかどうか。その中で、社会学は時にいびつな「他者」の像を構築してはこなかったか。また時にその科学的な語りの背後で沈黙を余儀なくされた「他者」がありはしなかったか。社会学にはすでにそうした疑問が投げかけられている。では、そのような批判の声を発した時、あるいはそれを受け取った時、私たちは具体的にどのような反省を行い、いかなる方法をもって現実の記述へと向かえばよいのか。

さらに見方を変えれば、それは、社会学の言説が自らの現実構成に対する「自省性」を、その理論構成そのもののうちにいかに組み込んでいくことができるのか、という課題につながるものでもある。例えば、「思考」と「言説」の成立条件を根源的に思考しようとするフーコーの試みや、自己産出的なシステムの生成プロセスに観察者の知の生成過程を組み入れていくルーマンの企ても、ここで問われている「他者」や「外部」との拮抗関係において、「理論的言

説」の場を確保しようとしたものであると言えるだろう。しかし、そうしたリフレクシヴな理論は、実際のところどこまで「他者」の呼びかけに応えるものとなりえているのか。あるいは、そうした理論に準拠した時、具体的な研究がどのような「作業」として可能となるのか。

このように、「他者」という言葉を契機として、私たちが引き受けねばならない問題が次々と生起してくる。それはすべて、明確な答えの出しにくい、その意味でとらえどころのない問題である。しかし、これを出発点として、現時点での社会学理論の立脚点を探し求めるような議論ができるのではないか。これが、テーマの設定にあたって企画者が抱いていた期待である。

このような（いささか乱暴な）呼びかけに応えて、シンポジウムの報告者（浜日出夫・鄭暎惠・吉澤夏子の各氏）から、それぞれに示唆に富む問題提起をしていただいた。しかし、シンポジウムの限られた時間の中では、それを受けて十分な議論をつくすことができなかったことがいささか悔やまれる。主題の設定が漠然としすぎていて、各報告者の議論を十分に接合しきれなかったことがひとつの要因。しかしそれ以前に、個々の報告の充実した内容を（司会者も含めて）参加者が十分に咀嚼するだけの余裕がなかった、と言わなければならない。お二人の指定討論者（宮坂敬造・菅野博史両氏）にとっても、相当に欲求不満の残る場面であったかもしれない。

しかし、もとより、「他者」という主題をめぐるやりとりに、そうやすやすと了解と収斂の地点がもたらされるはずもないだろう。企画者としては、シンポジウムでのさまざまな発言と、本号に寄せられた論考をきっかけとして、さらに議論が継続されることを願うばかりである。

（すずき　ともゆき　法政大学社会学部）